

藝大の方 大きな歩

—上野の杜のキャンパスガイド—

第8回★陳列館

歴史ゆかしい「上野」という場所に校地を構え、明治以来の伝統を誇る藝大の隠れた「名所」を毎回テーマを変えて紹介する。



陳列館正面



2階陳列室の高窓

「壁と光」を熟慮した設計

島津京

藝大美術学部の門を入ると、左手に見える建物が陳列館である。外壁に付けられた赤いスクラッチタイルが目を引きこの建物は、昭和四（一九二九）年に竣工し、平成七（一九九九）年に大学美術館の本館ができるまで、芸術資料館のメインギャラリーとして長く親しまれてきた。

本学美術学部の前身、東京美術学校では、開校当初から教育のための参考品としてコレクションの充実が図られてきた。参考品は文庫に収められたほか、教場の一部に陳列されていたが、大正期に入ると、生徒数の増加により施設が手狭となり、これらを効果的に閲覧させることは困難となっていた。既に明治期には将来必要な施設として「参考品陳列館」の建設が想定されていたものの、参考品自体も増加した大正末には、陳列館建設は切実な問題となっていたようである。加えて、学内作品を社会に発信する場としての有用性も早くから唱えられていた。東京美術学校は建設を文部省に要請し続け、ようやく昭和三（一九二八）年に建設が決定した。

陳列館の設計にあたったのは、建築科教授（大正十二「一九二三」年〜昭和七「一九三二」年在任）であった岡

田信一郎である。岡田は明治三十九（一九〇六）年に東京帝国大学工科大学建築科を卒業、翌年に東京美術学校講師となった。講師時代に大阪市公会堂の競技設計で頭角を現した岡田は、やがて日本初の恒常的なギャラリーとして計画された東京府美術館（大正十五「一九二六」年竣工、昭和五十二「一九七七」年取壊し）を手掛けることになる。岡田は美術館の機能を「壁と光」と捉え、陳列壁面の確保と採光また通気、美観、工費などについて熟慮した。この経験が黒田記念館（昭和三「一九二八」年竣工）、そして陳列館の設計に生かされることとなった。

陳列館一階は、壁面に広く窓が取られ彫刻などの立体物を想定した陳列室となっている。二階は、高い窓からの採光を生かし壁面にやわらかな間接光があたる空間で、絵画の展示に配慮されている。トスカナ様式の柱が効果的に用いられた外観、階段の石の手すりの意匠など、細部にまで気が配られた装飾面には、古典様式を使いこなした岡田の力量が伺い知れる。

戦後一時的に、二階部分を上下に分けて中三階、三階が加えられたが、現在は設計当時の空間に戻されている。（しまづ・みさと／大学美術館助教）



1階陳列室



2階踊り場



階段



2階陳列室



装飾的な雨樋



陳列館入口

